

John Wood

大きく行け！、 さもなくば家に帰れ



●NPO「ルーム・トゥ・リード」最高経営責任者

K (勝間) …二〇一五年までに途上国の子どもたち一〇〇〇万人に教育の機会を与える目標を掲げていますね。

W (ウッド) …〇九年には四〇〇万人の子どもたちがルーム・トゥ・リード (Room to Read) の学校、図書館、女子教育支援プログラム等を

利用しました。一〇年は五〇〇万人、一五年までに一〇〇〇万人を目指しています。

K …なぜ、かくも大きな成功を収めることができたのでしょうか。

W …金銭的、職業的な成功を収めた人の多くが、教育がなければ今日の自分ではなかったことをわかっ

ジョン・ウッド

すが、その理由は？

W …ひと言でいえば、女子教育以上に効率のよい「投資」はないか

ているからでしょうね。あなたもそうだし、私もそうです。だから、寄附が集まる。

教育によって、子どもの成功が保証されるわけではありませんが、機会の平等は保証されます。すべての子どもが本を読む権利、教育を受けるべきだというメッセージは非常にシンプルであるがゆえに、多くの人びとの関心を引きつけるのだと思います。

K …女子教育に特に力を入れていま

からです。一人の少女が教育を受ければ、彼女の家族、子孫にまでいい影響を与えることになるし、二万五〇〇〇円あれば彼女を一年間支援できる。

この地球で生まれたすべての子どもに、彼女らを教育し、本を読み聞かせ、学校の宿題を手伝ってやれる母親がいてほしい。そういう母親がいなければ、途上国の人びとは貧困の連鎖を断ち切ることはできません。貧困は複雑な問題で、その原因は一つではないけれども、私は貧困の非常に大きな理由は「教育の不足」にあると考えています。

アフガニスタン、パキスタン、ネパール、アフリカ諸国、世界のあらゆる場所で教育は不足しています。今朝目覚めた二億人もの少女が学校に通っていないのです。この問題を見過ごすわけにはいきません。

K …まったく同感ですね。

W …一昨年、投資家グループ——あえて「ドナー」(寄附者)とは呼ばないんです——とネパールに行きました。

新たに五〇〇人の少女を奨学金プログラムに追加することができて、最初はなんてすばらしいことだろうと思った。こんなにも多くの少女の人生を変えられるなんて。

Kazuyo Katsuma



●作家・経済評論家

でも、プログラムには四〇〇〇人もの応募があつて、私たちは三五〇〇人を断らなければならなかつた。倫理的にまったく弁解の余地のないことです。

○九年には幸いなことに四〇〇万人の子どもを支援することができましたが、アフリカ、インド、アジア全域には、まだ私たちの手が届かない子どもが何千万人もいます。五歳の女の子に誰が言えますか、「悪いけれど君は教育を受けられないよ」って。

いまや世界的なムーブメントとなった「ルーム・トゥ・リード」。当代きつての売れっ子作家であり、自らも社会貢献を実践している勝間和代さんがジョン・ウッド氏の経営哲学、信条を聞いた。

「社会貢献」だからこそ
ビジネスモデルが重要

K・・・九年は日本だけで一億二〇〇〇万円の寄附金を集めています。が、それでも足りないということですね。

W・・・私がマイクロソフトで学んだことの一つは、「大きく行け、さもなければ家に帰れ」という主義です。物事をちまちま考えたくない

んです。

だって、毎日学校に行けない子どもが三億人もいて、字の読めない人が七億七〇〇〇万人もいる。その三分の二が少女であり、女性なのです。世界は、このじつに大きな問題に対して、大きなソリューションを必要としている。そう思いませんか。

学校を一カ所、孤児院を一カ所支援するのも大変よいことです。しかし、ビジネスパーソンとして

は規模を考えなければなりません。最初は最初から教育支援を企業家の発想でとらえ、ビジネスモデルを練りました。

K・・・教育支援以外の社会貢献に興味はないのですか。

W・・・私たちがやることは、たった一つしかありません。途上国における幼稚園から高校までの教育支援です。「いつになったらマイクロファイナンス（貧困層向けの小口金融）を始めるのか?」、永遠に始めません。「上下水道整備プロジェクト?」、やりません。

私たちの目標は基本的に限定されており、だからこそ効率的であり、「結果」に対する説明責任も明確です。学校をいくつ開校したか、図書館をいくつ建てたか、子どもたちに何冊の本を渡したか。

これまでスタッフに言ってきたことは、きわめて少ない目標に集中し続けよう、そして絶対的に大きな規模に広げていこう、ということですね。

私たちの組織には冗談で「企業難民」と呼んでいるビジネス経験者がたくさんいます。ゴールドマン・サックスやユニリーバで働いていたんだけど、自分たちの未来は社会貢献にあると判断した人たちです。

したがって、事業計画を立て、予算を組み、野心的な目標を達成することは得意なのです。非常に業績を重視しており、上場企業と同じように四半期ベースで成果を

勝間和代

監査法人、コンサルティング会社、外資系証券会社等を経て独立し、話題作を連発。3女の母親として少子化対策の重要性を発信し続けている。2008年から印税寄附プログラム「Chabo!」を継続中。